

●神村 恵 作品作りについて

{ ソロ → 04年ごろから
カンパニー → 06年から

ダンサーとしての課題=イメージが身体を置いて先走ってしまう。2つが結びついていない。

↓

- ・できることを確実にやる稽古
イメージを追うより、実際にできている動きや身体を把握すること、実感すること
自分の内部で起こっていることを止めない
e.g) 立つ 歩く など単純なこと

ソロ作品

最初の課題=ダンス的なことをしなくては、作品としてまとめなくては、という思い込み

↓

- ・必要ない要素を取り除いていく
e.g) 表現するテーマ 動きと動きのつなぎ 脚を上げる など
→残った要素だけを並べる
- ・稽古の中で、自分が執着できる動きを見つける。
ある基準に向かって、できるだけ正確に動く。自分にとってだけ意味のあること。
- ・意味が生まれないように要素を並べる。自分がやっている以上のことを語らない。
- ・観客の視線にさらす。身体や動きが、よりむき出しになるような配置や流れにする。

これからの課題

↓

作品作りについて、「消去法」に代わる、何らかの軸を見つけたい。
自分の思い込みや、観客の期待や、通例、をもっと裏切ること。
終わり方。

カンパニー作品

やりたいこと＝集団でいても、個人でいること。

同じことをやっても、それぞれが自分の興味、動機に基づいて動く。

「山脈」(07年2月)

やろうとしたこと＝

- ・共通のルールを設定して動き、結果として出てくる動きはそれぞれ違うこと。
- ・個々の内部で起こっていること、身体の質感が見えること。
- ・空間の使い方。人をどう配置してどう図形を展開させるか。

結果→

- ・違う種類の興味を、区別つけずに迫りかけていた。
- ・動機を共有して動く、ということに関して、成果があまりに少なかった。
- ・ダンサー個々の個人的な動機にどこまで立ち入れるのか、という疑問。

「ビーム」(07年8月)

やろうとしたこと＝

- ・空間をどう使うか、物のように人をどう配置するか、ということだけに絞る。
- ・できるだけ細かく形を決めることで、外側から作る。ダンサーの内部にはなるべく立ち入らない。
- ・形を限定することで、動きの質に影響を与える。

結果→

- ・構成を綿密に作ることは集中できた。
- ・形を決めるなら、もっと厳しく限定して、徹底的に稽古するべきだった。
- ・一つ一つの動きの動機があいまいなままで、個々の身体のあり方が見えてこなかった。

「どん底」(08年2月)

課題 →

- ・ダンサーが、ごく個人的な確信を持って舞台に立てるようにすること。
- ・集団の中に生まれる暗黙の了解、ルールをどうやって認識して、どうやってそこから逸脱するか。(1人でいることと、集団でいることの違い)
- ・できるだけ無意味に配置したものから、無関係に新しいイメージが立ち上がるようにしたい。